

日本語学習者を対象とした古典教育の問題

リュブリャーナ大学 井田 尚美
idanaomi2002@yahoo.co.jp

1. はじめに

リュブリャーナ大学文学部日本研究講座では大学3年生の後期に、必修科目として「古典入門」という授業を設け、古典文法の基礎と比較的容易な古典文学の講読を行っている。50分×2の授業を週2回、約15週間行う¹。リュブリャーナ大学の3年生は、日本語のレベルとしては中級で、教科書は文化外国語専門学校編の『文化中級日本語II』を学習している程度である。

この「古典入門」の授業は、日本の古典文学、歴史、日本語学などの専門分野に進む学生にはその基礎となり、そうではない大半の学生にとっては、現代語に残る古語や古い表現を知るため、また一般教養、日本文化入門として有用である。また、そのような実際的な目的以外に、さらに、言葉は変化するものだという言葉の本質を意識させること、そして古語と現代語は断絶しておらず連続性があるものだと認識させることも重要な目的である。

大学3年次に必修で古典を学ぶというのは、日本の大学の留学生センターや東アジアの大学に比べると、早い段階で導入されると言える。東京学芸大学の教育学部と留学生センターでは、古典の授業は日本語能力試験1級レベルの学生を対象とし²、早稲田大学語学教育研究所でも対象学生は日本語の成績判定がAの者³、台湾の東呉大学日本語文学系の日本語専攻の学生でも古典の授業は4年生対象なので⁴、リュブリャーナ大学ではかなり早い段階での導入であると言える。ただし2009年秋から始まるボローニャ・プロセス導入による大学の新制度では、3年で学士、その後2年で修士というプログラムになり、その4年目、つまり修士1年目の後期で古典入門の授業が行われる予定である。

本稿では、この「古典入門」の授業を実践して生じた問題を取り上げ、外国人学生対象の古典の授業の今後の方向性について考えてみたい。この外国人を対象にした古典教育というテーマは、今まであまり取り上げられておらず、日本語教育学会の学会誌でもそれに関する論文は今までになかったようである。

2. 授業の概要

日本の学校文法に基づいて教師が作成したテキストと練習問題を使用する。テキストは日本の中学・高校で用いる教科書を基にしている。練習問題は作例を使わず、実際の古典作品からの引用文である。

まず、古語は現代語と無関係ではなく連続性があるものだと学生の興味を引き、古典を学ぶ有用性を認識させるために、現代にも古い表現が残ったもの、例えば詩歌、映画や小説のタイトルで「風と

¹ 大学4年次では、選択科目の中に「古典II」という授業があり、漢文の初歩を学ぶが、漢文も古典の基本的知識が必要なため、「古典入門」がその基礎となる。

² 高橋、林（2005：51）

³ 松縄（1984：88）

⁴ 尾久（2002：325）

共に去りぬ」「知られざる傑作」など、またことわざの「時は金なり」「百聞は一見に如かず」などを取り上げて古い言葉の表現を説明する。また、「まつげ」（「つ」は古語で所属の関係を表し、「目＋の＋毛」ということである）、「我が子」（「我＋の＋子」）など古い言い方が残っている語の語源、語構成なども解説する。

そして、古典文学史を概観し、その後、歴史的仮名遣いの説明、品詞分類を含めた文法説明に入る。文法事項は品詞ごとに行い（橋本文法の10品詞）、動詞、形容詞、形容動詞の活用語（用言）から始め、後に名詞、副詞、連体詞、接続詞、感動詞など活用のない自立語、そして付属語である助動詞、助詞について説明する。最後に、現代語より複雑な体系を持つ敬語を扱う。その間、適宜練習問題を行う。文法事項の3分の1くらい終わった頃、すなわち用言の説明が終わった頃から、単調さを緩和するために、「竹取物語」「宇治拾遺物語」、「枕草子」などの文学作品の抜粋の講読を、文法と交互に取り入れる。

アメリカ・カナダ大学連合日本研究センターや早稲田大学語学研究所の古典の授業では、例えば歴史的仮名遣いの練習のためにペアワークやフラッシュカードなどの日本語教育の手法も用いているとのことだが、リュブリャーナ大の授業では、それは用いていない。

3. 問題の所在

古典の授業を行う上でまずぶつかる壁は、外国人学生に対する古典教育が体系化されておらず、教授法などの方法論がまだ確立されていないことである。

外国人または日本人によって英語やフランス語などで外国人学生向けの文語文法の解説書が何冊も出版されているが、それらは学校文法の文語文法をそのまま翻訳したものである。

また、歴史的仮名遣いを教える際にも、大学3年次で外国人にとっては煩雑な規則であろう歴史的仮名遣いを教える理由があるのだろうかという疑問が生じる。

3-1. 文法

外国人に古典を教える場合、直ちに直面する問題が、外国人を対象とした古典文法が存在しないことである。ゆえに、日本の学校文法の古典文法に則って教えざるを得ない。それには、まず日本の学校文法の現代国語文法を教え、その後、学校文法の古典文法を教えることになる。直接的に古典文法を教えることができない。

しかし、外国人学生は既に外国人向けの日本語教育文法で日本語を学習してきている。学生が既に学んできた日本語教育文法と、現代国語文法の間には乖離、ズレがある。両者とも、「日本語」という同じ実体の記述をするものであるが、2つの異なった記述体系である。教室はこの2つの体系が衝突する場となる。日本では高校までに学校文法の現代国語文法と古典文法を学ぶ。これらは一つの統一された記述法であり、また日本の中・高生は、教えられたことに疑問を持たず受け入れる傾向が強い。しかし古典を学ぶ外国人学生は既に大学生であり、既に異なった記述の文法を学び、かつ日本の中・高生より、問題意識が高く、学生は学校文法と日本語教育文法の違いや矛盾に気がつくことになる。

学校文法の国語文法と日本語教育文法の違いでは、まず用語の違いに気がつく。例えば、国語文法における「形容詞」「形容動詞」が「い形容詞」「な形容詞」であるというように、同一のものを異なった用語で名付けているということがあるが、しかしこれはただ用語の名付けの問題ではなく、品詞分類の違いである。

また、品詞ということで、国語文法では助動詞という品詞を設定し、「られる」「させる」「ます」「た」「ない」「よう」などを助動詞としているが、日本語教育では「ます形」「た形」「ない形」「意向形」のように、動詞の活用形としている。それらのズレが学生の目の前で明らかになる。

外国人学生に学校文法を教える時に最も問題となるのは動詞の活用である。「未然形」「連用形」「終止形」「連体形」「仮定形」「命令形」というパラダイムで、国語文法の動詞の活用は説明されている。日本語教育文法では、未然形は「ない形」「意向形」、連用形は「て形」「た形」「ます形」、「終止形」「連体形」は「辞書形」である。古典入門の授業では、この現代語での対応を示した後、古語の動詞を、やはり「未然形」「連用形」「終止形」「連体形」「已然形」「命令形」というパラダイムで説明する。しかしもちろん古語で未然形に対して「ず形」「む形」、連用形に対して「て形」「たり形」と名付けることはしない。

例えば「書かない」は日本語教育では「書く」という動詞の「ない形」だが、学校文法の枠組みでは「書か」が動詞の未然形、「ない」が打消しの助動詞、と分析的に説明しなければならない。この部分は日本語教育文法と文語文法の違いが、学生の前できわだってしまうところである。

この「未然形」「連用形」「終止形」「連体形」「仮定形」（「已然形」）「命令形」という動詞の活用が、50音図に従って形態（音）だけで整理されたもので、意味的、統語的に統一された基準でできていないというのは、学生達の目にも明らかであり、学校文法の矛盾が教室で露呈してしまう。

この動詞の活用表の基礎は、江戸時代の国学者が作ったものであり、それらが現代まで継承されたものである。学習者は、平安時代の古典よりも「江戸時代から明治時代に作られた国語文法の考え方」という別の意味での古典を学ぶことになっている。

この動詞の活用の問題に代表されるように、授業の現場では、日本語という一つの体系・現象について、学習者に2つの異なった文法・品詞を与え、混乱させることになる。また、学習者は現代日本語文法をある程度習得しているので、まず学校文法の現代国語文法を教え、その後、学校文法の古典文法を教えるのだが、学習者が学習したばかりで基礎が磐石でない現代国語学校文法から直ちに古典文法へ移行しなければならないということも問題である。

3-2. 歴史的仮名遣い

歴史的仮名遣いは、平安時代の発音どおりの表記法である。周知のように、平安時代以降、日本語に音韻変化が生じたが、1946年までこの表記法が続いた。音韻変化とは、ア行の「エ」とヤ行の「エ」の音の統合、ハ行転呼音、ワ行の「ゐ」「ゑ」「を」とア行の「い」「え」「お」の混同、au→ô、ou→ô、iu→yû、eu→yôなどの長音化などである。

今日、古典のテキストを読む場合、通常これらの音韻変化後の音で読む。外国人学生に、これらの歴史的仮名遣いの読み方の規則を覚えさせるのは負担である。平安時代は「かは」を[kaha]（より正確には [kaΦa]）と読んでいたのだから、煩雑な歴史的仮名遣いの読み方を教えず、「かは」は [kaha] と読ませればよいのではないかという疑念もわく。平安時代のテキストを読むために、中世から戦前までの読み方で読むというのは、平安時代のテキストに、直接的にアクセスをするのではなく、間接的なアクセスをすることになる。

しかし、日本の学校教育においても、古典の本文を読む場合、「かは」を[kawa]と読む、すなわち音韻変化後の音で読むのは、「現代語とあまりに懸け離れた古形で読むと、耳で聴いても直ちに語の認定

ができないためである」(高橋、林 2005 : 51-52) ⁵とされている。ここでは黙読(視覚)ではなく、音読の重視が見て取れる。

古文のテキストを文字のまま読ませれば、煩雑な歴史的仮名遣いのルールを覚える必要もなく、かつ平安時代の発音により近い音で読むことができる。しかし、学生が日本へ留学した際のことを考えると、日本では古文を音韻変化後の音で読む慣習なので、日本のやり方に従った方法を取る方がよいと言える。つまり、歴史的仮名遣いを学習する理由というのは、むしろ日本の現在の古典学習法に合わせるためであるという要因が大きい。

4. 現代日本語と古語文法を関連づけて教えるために

では、歴史的仮名遣いはやむを得ないとしても、文法面の問題はどのように解決していったらよいであろうか。2つの可能性が考えられる。

- ① 日本語教育文法から学校文法の文語文法へ移行する方法を考える(既存の文法間の移行)
- ② 日本語教育文法、学校文法の現代国語文法と文語文法で共通の基盤に立つ文法を構築する(新しい文法の構築)

①について佐久間は、「この現代語学習用の文法から、伝統的な日本文化理解のための文法へと移行するための手続きを、短時間で能率よく進める方法を開発することが今後の課題となっている」(1980 : 211)と述べている。しかし、この「外国人向け日本語文法」と「学校文法」の二つの間を移行させるというのは、あまり容易ではない。この二つは、日本語という一つの体系を、独立した別の説明方法で記述しているからである。しかし、当分学校文法が変更されることは考えにくいので、この①が現実的な方法かもしれない。また日本の学校文法を学ぶということ自体、日本で人文系の教育を受けたいと思っている外国人学生にとって有効と言えるかもしれない。

しかし、理想的には、日本語教育文法と学校文法の現代国語文法と文語文法の間で共通の基盤が作られるのが望ましく、また外国人が古典文法を学ぶことを考慮に入れた文法が考えられるのが望ましいであろう。

②の日本語教育、現代国語、文語共通の基盤に立つ新しい文法の構築については、文法的、つまり意味的、統語的基準で整理した文法にするのがよいと思われる。本稿において、①の既存の文法間の移行、②の新しい文法の構築ともに、体系的に整った方法を提示する用意はない。しかし断片的であるが、たとえば特に問題が目立つ動詞の活用については、鈴木康之(1986、1997)が提案するように、テンス(過去/非過去)、ムード(断定/推量)、丁寧さ(丁寧/非丁寧)、認め方(肯定/否定)のような文法カテゴリーの基準で整理・分類する方法を整備することが望ましいのではないだろうか。以下に鈴木が提案する動詞活用表を引用する。

⁵ ただし、松縄は「古語や古文の学習の場合は、『耳で聞いて口で話し、目で読んで手で書く』言語活動の4技能のうち、主に読解が中心となる」(1984:95)と述べている。

古語

断言法	(1) 一般叙述形	書く	
	(2) 第1過去形	書きき	
	(3) 第2過去形	書きけり	
推量法	(1) 一般推量形	書かむ	
	(2) 過去推量形	書きけむ	
命令法		書け	(鈴木 1986 : 33)

現代語

		普通の言い方		ていねいな言い方	
		肯定	否定	肯定	否定
断定の 言い方	現在	書く	書かない	書きます	書きません
	未来				
	過去	書いた	書かなかつた	書きました	書きませんでした
推量の 言い方	現在	書くだらう	書かないだらう	書くでしょう	書かないでしょう
	未来				
	過去	書いただらう	書かなかつたらう	書いたでしょう	書かなかつたでしょう
誘いかける 言い方		書こう	(書くまい)	書きましょう	
命令する 言い方		書け	書くな	書きなさい	

(鈴木 1997 : 42)

このような文法的対立を基にした動詞の活用パラダイムを採用し、国語教育と日本語教育、現代語文法と文語文法で統一した基盤の文法を作るのが理想的であろう。

5. おわりに

上に述べたように、教室では、学校文法と日本語教育文法の不整合性が露呈する。ゆえに、日本語教育文法から文語文法への橋渡しの道筋を示すか、理想的には、学校文法と外国人向け日本語教育文法の共通した基盤を作るのが望ましいと思われる。

現在、学校文法の慣習に則って文語を教えざるを得ないので、結果として学習者は、平安時代の古典作品よりも、「中世から 1946 年までの仮名の読み方」、そして「江戸時代から明治時代にかけて作られた国語文法の考え方」という、学校文法という別の意味での「古典」を学ぶ結果になっている。

参考文献

- 尾久幸子 (2002) 「日本古典文学鑑賞のための文語文法指導の一試論—文語文法から現代文法へ—」『蔡茂豊教授古稀記念論文集』東呉大学日本語文学系、pp.325—338
- 杉本紀子 (2000) 「留学生と学ぶ古典—留学生と帰国生の共生を目指した指導実践報告—」『研究紀要』25号、pp.73—76
- 鈴木泰 (1995) 「古典語と日本語教育」『国文学解釈と鑑賞』第60巻7号、至文堂、pp.139—144
- 高橋久子・林明子 (2005) 「留学生対象科目としての古典の位置付けと実践例：東京学芸大学における日本語教育の場合」『国際教育評論』02号、東京学芸大学国際教育センター『国際教育評論』編

集委員会編、pp.49－58

立松喜久子（2000）「文語文法を教える 外国人上級学習者のための古典入門授業」『アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター紀要』23号、pp.1－24

松縄啓子（1984）「日本語教育における古典学習について」『講座日本語教育』20号、早稲田大学語学研究所、pp.81－114

尹淑姫（1986）「外国人の見た古典語文法」『国文学解釈と鑑賞』第51巻8号、至文堂、pp.99－105

楊金萍（2003）「中国における日本語古典教育の現状と将来」『国文学解釈と鑑賞』第68巻7号、至文堂、pp.86－93

〈書評〉

佐久間まゆみ（1980）「Akira Komai : A Grammar of Classical Japanese」『日本語教育』通号41、日本語教育学会、pp.209－220

Bentley, John R. (2001) *A Descriptive Grammar of Early Old Japanese Prose*, Brill, Leiden, Boston, Köln.

Ikeda, Tadashi (1975) *Classical Japanese Grammar illustrated with Texts*, The Tôhō Gakkai,

McCullough, Helen Craig (1988) *Bungo Manual: Selected Reference Materials for Students of Classical Japanese*, East Asia Program, Cornell University, Ithaca, NY.

Pigeot, Jacqueline (2004) *Manuel de japonais classique – Initiation au bungo*, Langues Mondes L'Asiathèque, Mayenne, France.

Shirane, Haruo (2005) *Classical Japanese: a grammar*, Columbia University Press.

Wixted, John Timothy (2006) *A Handbook to Classical Japanese*, East Asia Program, Cornell University, Ithaca, NY.